絵本浄瑠理姫譚二巻

浄瑠璃媛物語巻二

狂蝶子　文麻呂　著

○浄瑠璃媛

抑三河の国矢矧の里といへるハ、或ハ矢作とも書て、昔より名たゝる駅路にてぞありける、むかし日本武の尊東征の時、此宿にて、矢を多作らしめたまひけるとなん申伝へたる、爰の長者と聞えしは、井口藤一といふものなり、豪家にてあれバ誰も姓名をいふものなけれど、遠く先祖を尋ぬるに、利仁将軍の後にて、越前に斉藤といひ、加賀にハ加藤、越中にハ井口とて、皆同し流の藤原なり、長者が高祖、井口の新中次宣敏といひしハ、越中の庶流にて、八幡太郎義家に仕へまいらせ、剛の座にも列りしが、疵数か処を蒙ふり、かたはの身となりて、今ハ奉公の事かなハねば、越中より末の弟、三郎宗辰を、よびのぼせて、家を譲り與へ、由縁ありて、三河にぞ引篭りける、八幡殿かれ忠勤なるうえ、おもハざる身となりしを不便におぼして、生涯安く過さんやふにとて、庄園田畑の料に、金あまた給ひしに、子の代になりて、弥家冨田畑買そへ、しかも筋ただしき人なれバ、猶武士のやふにて、皆人尊ふとミうらやミけり、かゝりし後も兵の道ハ無下に忘れしにハあらねど、更がへりて出て仕へんにも、させる高名もなくてハ、中々人笑へなりとて、猶豫つゝ代々を経て、当時の長者藤一が代になりぬ、其頃平治の軍果て、中納言師仲卿、東の配所下野の国室の八嶋にぞ下らせ給ひける、平治二年の弥生の末花諸ともに

うつろひ給ふ御身を、打なげき給ひつつ、此三河の国矢矧の宿に到り給ひける処にとりてハ、矢矧の藤一名たかき者なれバ、取敢ず御宿をぞ仕りける、師仲卿御対面ありて、ねんごろの仰あれバ、長者申けるハ、源氏の御方人と承ハれバ、ゆかしうこそ存じ候へ、おのれが井口の家もと源家相傳の者にて候とて、家の系図などくハしう聞えけれバ、俄に親しう覚して、こゝにのミ物思はしさをも、紛れぬるこゝ地したまひて、心の外の日数をぞ経給ひける、其程徒然の御慰めにとて、前の長者が最愛の娘、藤一が為にハ妹なる、一花といへるを参らせける、独り寝ハ君も知りぬやの心ばへなるべし、師仲卿見給ふに、都にも恥ぬあてやかさなれバ、寝よげに見ゆる若艸そと悦ばせ給ふ事一方ならず、是ハたゞ打つけなる事のやうなれど、深き故よしのありける事にて、師仲卿のまだわたらせ給ハざりし、二日ばかりまへに、長者兄弟の夢に、家の内殊の外に光りかゝやきけれバ、いかなる事ぞとあやしミけるに、ひとりの法師出来りて、更にあやしむ事なかるべし、これハ此家の中に有鏡の光りなり、其光曇らせじとならバ、一花都人に逢ひ奉り、めてたき児をまうけぬべし、おのれこそ方来寺の法師なれといふ、見るが内に法師の身よりも、金色の光りを放ち給ふ、あなとふととて、手をあわせつゝ、おもはず声をたつれバ、南柯の夢ハさめにけり、月の顔のミあざやかなれど、紫の雲の猶たなひきたる心地す、明の日語り合ひて、不思議なるに、妹の一花年頃、方来

寺の、薬師如来を信しつれバ、其御仏の御さとしならん、有難事とハおもふ物から、其心解がたくてありしに、師仲卿こゝに宿らせ給へバ、都人との御告ハ此御方にこそとて、かく参らせけるなりとぞ、相おもふ御中なれバ、爰にいつ迄もとおぼしけれど、都の聞えいかにとて、配所へぞおもむかせ給ひける、されバ宿世の御契や浅からざりけん、かりそめとおぼせし御かたらひに、こころ苦しき身となりて、其年の師走、きよらかなる女君を生ミ奉りつ、御告ありし鏡の光りのやうに、産屋の内俄に明くなりて生れ出給ふ、児の御身よりも光りさして、しばしが程ハかゝやきたり、長者を初人々驚きめでつゝ、家の内の悦びハ、竹取の翁が昔にも勝て、中々いふも更なるべし、やがて下野におハします、御父師仲卿の御許にもしらせ奉れバ、父君の御悦まして斜めならず、我配流の身ならすバ、とミに行て傍にそひ給て思ふまゝにいつきかしづき立んを、まかせぬ物ハ世の中よとてそれにつけても、赦免の事をぞ願がハしうおぼしける、此折しも初め薬師の夢に、見え給ひしこと申送りしかバ、御名をも下野より給ひて、瑠理の縁あれバとて、浄瑠理媛とぞ名づけ給ひける、長者親のやうに撫かしづきけるに、うつくしき事、玉をつかねたらんやうにて、見奉るものゝ命も延ぬるやうに思ふ、日にそへてかしこふおはせしが、四つになり給ふとしの春ある日乳母にいだかれて、庭におり給ひしが、猶片言の声うつくしうて、仰られけるハ、まろが鏡、あの御堂のもとにあれバ、取ておこせとの給ふ、此御堂ハ方来寺の御影をうつして、朝夕母

君の一花が礼拝し奉る、薬師如来のたちおはす所なり、媛君せめのたまえども、乳母ハ心も得ず何事の給ふぞ、君の御鏡ハあまた御櫛笥にあり、などてかしこに候ハんといふ、いたうむつかり泣て、其日ハやミ給ひしが、日毎にさやうに仰ありて此たびハよろぼひ〳〵あるかせ給ひて、みづから又かの御堂の脇なる、梅の木のもとにあゆミより給ひて、鏡のあるハここよ〳〵と、ほそき御手にて指ざしつつ、爰にこそ埋もれあれとの給ふ、乳母を初付そひたる女ども、あまりに不思議なれバ、下男よびて掘せ見るに、一丈ばかり掘つれバ、金に掘当ぬる音す、人々いよ〳〵目を留おれバ、やかて打かへす鍬につきて、一ッの鏡ぞ出たる泥にそミたれど、けしからぬばかりひかりわたるを、媛君それこそとの給へバ、局の左近といふが持行て、水打そゝぐ久しう土に埋れたれどいさゝかの曇りだになし、媛君幼心にいとううれしう覚して、こちへとてミづから持て、母君の一花にも見せ給ひ、さてしはしも御手を放給はず伯父の長者か前へ行たまひて、まろが宝 失ひつるを、（今日）けふなんふたゝび得て候との給ふ、一花ハ其故を乳母に聞ど、更に不審ハ晴ず、ただ此鏡我家にありぬるぞとハ、如来のの給ひしかバ、仏の授給ひし御宝にやとおもふ、長者聞てさように放たせ給はねど、他人ならぬ此翁にハ見せたまへ御身の宝ならんに、伯父なる者の見でやハあらんといはれて、幼き媛君も道理に服して、それもしバしのうちよ

とて、長者にわたし給へバ、長者とりて見るに、冨樫氏の為に鋳つるとぞしるしたる、長者が下人に知る者ありて、是ハ冨樫兵衛太夫殿の御娘濱夕と申せし人のもたせ給ひて加賀の国某の明神に納めありし物なり、あやしや此御屋敷にある事ハといふ、長者驚きてそれをなどて、御身の宝とハの給ふぞと問へバ、媛君きと見おこせ給ひ、打笑ミながら何にまれ、まろが物に違ひなしとの給ふ、よりて長者も一花も、色々に考へつつ思ふに、全く薬師の利生にて、其濱夕と云る女君のふたゝび一花が腹に宿り給ひぬるなるべし、希異の事にも、かたじけなき事にもおもひけり不絶流るゝ水のやうにて媛君七ッの年に、師仲卿御赦免ありて都へかへり給ふ、まづ矢矧へ立より給へバ、とし頃恋泣給ひし媛君の、けふぞまことに逢見奉るとて、悦ばせ給ふ事限りなし、長者一花もよろこびあふ事大方ならず、皆々ありがたき都の御沙汰なりと打さハぐ、師仲卿ハむかしに替らぬ、人々の懇なるあつかひを嬉しと覚す、媛君ハ袴の紐結さして出むかへ、御さしぬきの裾にまつハれ給へバ、師仲卿ハ涙を雫とこぼし給ひながら、いでなつかしやとて膝にかきのせて、何事もの給ハす、たゞ心の行ばかり泣給ひて、扨の給ふやうハ、いかに手かき給ふや、琴ひきたまふや、さても〳〵うつくしき生れかな、我にハ生れまさり給へりとて剃尼ほどにおひし額髪かひ撫給ふ、媛君も初て見給ふ、父君の御顔つくづくと打見給ひて、芸能のかたはしを

だに習ひとり候ひしハ、父君の御代となりて、伯父君のよくおしへさせ給ひし故ぞかしされど心おそけれバ、よろづかひがいしからずとの給ふ、愛敬ある顔つき、かはゆらしき御声ハ作りたる人形の物いふやうなり、師仲卿ハ長者に向給ひて、扨も此児ミづからはぐゝまぬ事の心くるしかりしを、我になりて見あつかひ給ふ事、悦ひいふべきやうもあらずとの給へバ、いかゞハ田舎人の養育なれバ、はかばかしからず候へども、やごとなき筋ハ、まことにハちじるき物にて候なりと会釈すれバ、それに就て一花またかの鏡の事を語り申けれバ、師仲卿も驚き給ひ、仏の下し給へる子なれバ、さるべき不思議もあらん、又何事をか疑がハん、それハ冨樫氏の娘なる人ふたたび生れ出たるに相違なし、前因といふ事も争ふべからずとて、さま〳〵の絶て久しかりし御物語どもあり、星の逢瀬の心地し給ひて、数日こゝに逗留し給ひしが、帰洛の日限あまりに延引せんハ、かしこしとて、立せ給ハんの御用意も、明日明後日といふ日になりぬ、師仲卿長者に向ひ給ひ、まづ度ごとのもてなしを悦び給ひ、扨のたまひけるハ、浄瑠理媛が事限りもなくかはゆけれバ、一花もろともに都へ伴ハんとハ思へども、勅免の序に遠き国より、女を連て登りたりといはれんのミならず、勅勘の内に身の咎をかへりミずして色に心を委ねたるやうなり、されバ程経てむかへ取らんだに、いかにぞとおもへバ、一花にもいひ聞せし事あり、もと此児おことが妹に出来、おのれが子なりといべとも、

しかし是おことが、世つぎなきを愁へをりしかバ、一花か祈参らせし、御仏のあたへ給ひつる物と覚ゆ、されバこそ此家にゆかりある冨樫の家の人の生れ出たるなめれ、よりて思ふに此子おのれが子ながら、子にあらす、又遠き世界にはなち置て、いぶかしきおもひをせんよりも、おこと養ひにせよ、姪ながら子のやうにせしおことなれバいづれにても撫育の情ハ同しからんなれと、おことが子にせバおのれか心いさゝハ安きやうなり、おのれ都に残し置たる子どももあれバ、跡つがせんにも、聟とらんにも、不足ハなし、扨いかにとの給ふ長者かしこまりて申けるハ、こハ存じもかけぬ御仰なり、かゝる田舎に埋もれさせてむくつけき武士にあハせまゐらせんハ心くるしき事なり、都へわたらせ給ひなバ、ゆく末何がし殿の北方と仰かれ給ふ御身なれバ、此所に置奉らんハ勿体なしと申す、師仲卿聞せ給ひ、それもげにさやうにやあらん、さりながら今都に、ありとある月卿雲客ハ多くハ皆伊勢平氏ならぬ者に、勢ひのあるハなし、其筋わろき平氏のなま公卿に、縁を結て諂ハんハ、中々耻辱にてこそあれ、されバ平家に打むかいたる源氏の内のさるべき武士に、逢せまほしくおもふなり、母の筋ハ利仁将軍の藤原にて、いはんや清和の源氏に仕へし者の末なり、されバ筋は異なれども、おのれも又源氏なれバ、かやうに親しうならんハ、つぎ〳〵しきことならずやとの給ふ、長者つぶさに承ハりて、道理をわけ給へる御仰、さらんにハいかでいなミたてまつるべき、姪とも主人ともおもひしをけふよりハ子といふ文字の

重きをそへて、ことに大事に養ひ申べしと申す、師仲卿悦ひ給ひ、さらバ今より子にて子ならず、藤原を名のらすべしとて、是よりぞ藤原の瑠理君とハ申ける、母の一花ハ此たびもなま中にて別れ奉り、都のぼりも叶はぬ事と聞バ、かなしき事やらんかたなし、されど媛君ばかり取れなハ、まして哀しからんとわれにおもひ直して、めでたく門出をおくりたてまつる、表だちてはあしからめ、程経ハしのびて召のぼせんとの給ふ、誠をこめし御詞を力草にて、別れたてまつれバ、誰も〳〵ひとしく袖をぞぬらしける、かくて此瑠理君成人し給ふまゝに、限りなき美しささかりにねび調ひ給ふ、都よりも折々の御訪ハあれど、一花も瑠理君ものぼらせ給ふ事なりがたう、心にしたかハぬ世を恨ミ給へど、長者ばかりハ子となし参らせし、かはゆき人を手を放ちて、いかで都へのぼせんとぞおもひける、しかるに世の常なさをいかにせん、此君十と申す年に、一花ハなくなりにけり、局の左近ぞ母君になりて見あつかひける、はや花心もつきておはします頃、父の長者都よりの帰りに、吉次が妹白糸を養ひて帰りける、二月ばかりか瑠理君よりハさきの生れなれと、養ひやうのおそけれバ、妹となしてかしづきけり、しかのミならず白糸養ひし後ハ、瑠理君をハ子ながら、いよ〳〵主のごとくおもひ、師仲卿に一花が仕へしやうに、白糸を瑠理君に仕へさせける、白糸ハもとより男持べき心ならねバ、却りてそれが心安しとて、いとよく仕へたり

けり、つかひ給ふ女どもも多けれど、瑠理君の本性ミやびておハせバ、誰も〳〵御心にかなひしハ少なく、よき相手ほしがり給ふほどなれバ、馴給ひて後ハ、実の兄弟のやうにぞおぼしける、瑠理君ハ幼なきより、雛遊を好き給ひて、実の父君師仲卿の御許に乞ハせ給へバ、めでたき品ども小さき道具迄も、ミな都の上手が作りたるを、多くおくらせ給へりけり、しら糸ハ又画をかく事を好ミて、互にミやびしわざなれハ心の合ひしもげに理なり、ことしハ十四にておハしけれと、まだ子めかしくて、雛の内裏造りするゑて、童のやうにぞくらし給ひける、長者あるとき、雛あそびし給ふ処へ来かゝりて、打見ながら男の雛ハなど、参内し給はぬぞと戯ふれていへバ、瑠理君ほゝ笑ミたまひて、北の方の風引ておハせハ、看病にかこつけて、はなれにくうおはすとの給ふ、白糸傍にてさりとも、外心ハおハさぬ殿にて、ましますといふ、長者も打笑ながらふたりともさばかり、色めかしき心つき給ふ今ハ男持たまへとたハふれのやうにいへど、瑠理君ハ恥らひて、ただうつむきておはす、しら糸会釈して、わらハが男もたぬ事ハ、兼て知らせたまふ事なり、また瑠理の君ハ、廿にならせ給ふまてハ、聟君の事いひ出させ給ふな、何か御心のおはす物をとせず、長者ハ仏の御子のごとく、主めいておもへバ、其侭にてふたゝびいふ事もなく、局の左近も、聟君の事などハいひ出さりしが、ある日瑠理君、白糸に向ひての給ふやうハ、わらハはおことにも勝りて養

親の恩ふかけれバ、兎にもかくにも父の仰にまかせて、夫をも持なん、さるにても夫もたらんにハ、都人をとてそおもふなれ、されと都人をバ見し事なくおことが兄の吉次殿にだに、父君の掟厳しくて垣間見もさせ給はば、都の雛取り寄せて、其人形も誠の人に似しやらん、似ざるやらん人にして逢ひ初んとおもふ形のハなし、さるにても、おこと里若殿とやらんに操だてして其人に似たる男ならバ、操も破らんと、いつそやも語りてしが、いかばかりのやさ男にかと問給ふ、大方の友どちならバ、恥かしけれど、かかる事も隠し合ぬ兄弟の中なれバ、白糸詞にてハいひもとりがたし、さらバ画にかいて見せ参らせんとて、里若殿が姿をうつしとりて、それにつきても泪ぐミける、瑠理君ハしらぬ人の、まして世になき人の画すがたに見ほれ給ひてさてもうつくしき姿かな、お事が慕も無理ならず我もかゝる男こそしたハしけれ甲斐なき事なれバ、人形にしてだに、明くれ打見ばや是よりも、すこし若う作らせん、扨恥かしながら、此人形に添ひをるべき、女の人形も作らせてんとの給ふ、白糸、媛君の姿をいとよく似せて、衣装まで露違はぬやうに書たりやがて二ひらの紙画を本にやりて、都へのぼせてあつらへ給ふ、其頃都山科の里によき工ありて、是ハ鞍馬寺の児の牛若殿に似たるとて、牛若殿の姿をそのままに作り来れバ、悦びたまふ事大方ならず今迄多く雛の及ばぬ作りさまな

りとて、両方ともにめてたき織物の装束をきせ、女の方にハ上ぎぬをバ、瑠理君と同しきを着せて、人の様子にあへしらい給ひて、日ごとにたゞ雛の御遊のミにて、二人ともにそれにてぞ心を慰さミける、されど却て、物おもひ草の出来そひたるやうにて、病も引出ん気しきなれバ、それにハ晴々しきところこそよからめとて、局の左近進勧まいらせて、明る年の春の頃、白糸を初多くの女どもつれて、矢矧より一里ばかりある別荘へ行せ給ふ、別荘ハ桜の名所なれは、弥生のころハ、ましてそこにのミぞおはしけり、扨も其後鞍馬におはす、御曹司牛若丸ハ、貴船の祈願満ずる七日の夜僧正快舜より夢のやうに兵書を授かり給ひ、樵夫の喜三太を初めて臣下にし給ひしかバ、霊験いよ〳〵頼もしく、世に嬉しき事に覚しく、かの兵書を人間に見給ふに、七書にいひもらせし事、匡房卿の伝へなき事まで、書載たり、是ハ現在に用をなす、眼前の事、奢る平家を亡して、父の供養にしてんにハ此書にます事こそなけれとて、いよ〳〵心を留て読給ふ、かたへにハ猶喜三太を相手にて、忍び〳〵の武芸怠る事なく、胸に孫呉の智謀を蓄ハへたまへれバ、過し頃虎を放つにたとへし、平家の臣下が先見の慮かり、今こそ思ひ合されたれ、此程また多門天へも参詣し給ふに、白糸が兄の金売吉次、これも参詣怠らすして、ある日逢たてまつりて、木曽義仲の事申出て、信濃の国へ連参らせける、此時正門房ハ

喜三太をハ、都の左右告知らせよとて留めおかせ給ふ、浄瑠理媛の事にあづからねバ、くハしうハ記さず、さて牛若君ハ行々て矢矧へ到り給ふ、吉次ハ白糸が兄といひ、まして、年頃の親ミなれバ、もて扱ふ事よの常ならず、長者牛若の御姿ただならぬ者と見しが、三献の酒も過て後、つれの児ハ御親族に候か、又ハ他人の親しきにかと問へバ、吉次一族にてもなく、他人にても候ハず、今迄ハ鞍馬におハせし児にて候とばかりこたふ、長者又いひけるやうハ、是まで御辺の我方に宿り給ふに、かやうのうつくしき人具し給へる事なし、鞍馬といはるるにて思ひよりぬ、もしくハいつぞや白糸が語りつる牛若丸殿にてハおはさぬかといはれて、吉次打笑て園生に植てもかくれなき、紅ゐなれハ、わざと和殿の御覧じ分るを待て候ひしぞといふ、牛若丸ハさすがに初々しく、会釈してのミおハするを、長者ミづから御袖をとり、上の座敷に居奉り、源氏の若君達待たてまつる事久しけれバ、いかで見違申すべき、もと某が家ハ御家人の筋にて候へバ、更に〳〵御心置せ給ふなとて見参の礼儀終りて、吉次よろづの物語して、白糸が事をも問ひける、是ハ瑠理君と共に別荘に居る程なり、平らかにて居りぬと答ふ、やがて饗應も更れバ、おの〳〵ふしど〳〵に入りて、牛若丸も旅の労休め給ひけり

○　衣の里

かくて矢矧の長者ハ、牛若丸の信濃へ下らせ給ふ故ハ、承

ハりながら、師仲卿の御本意のごとく、さるべき源氏なれバ瑠理君の聟にせばや、併媛君の是をもうけがひたまふまじくや、何にまれ爰にのミ、留置まゐらせたくおもふに一日をだにすこさず、尾張の国熱田の大宮司季忠が許より、人おこしける、此季忠と申すも、義朝の北の方の兄にて疎からぬ人ながら、此度の旅ハよろづ吉次を便りて、かれがしるべにのミ宿り給ひ、まして吉次連てハ障なる事ありて、熱田へハ人ばかりつかハしけれバ、返事ながら人奉りけるなり、其文のやうハ昨日ハ、御道のたよりに御状たまハり、うれしけれど、たまさかなる御旅に、立寄らせ給ハぬこそ遺恨なれ、などさま〳〵に書つゞけて、さて奥にいひおこしけるやうハ、かりそめならぬ御旅行なるに、児の御姿にてハいかゝ候ハん、人の心たのまれぬ世の中に候へバ、同しくハ男にならせ給はんこそまさり候ハめ、などこまやかに書てあり、牛若丸もげにもと覚すけしきにて、まづ使をバ帰し、扨吉次をよびて文をミせ給ひて、かう〳〵大宮司の許より申おこしたり、おのれこころづかざりき、義仲が許にいたらんに、年すでに十六歳にならんする者が、牛若丸と名のらんも、あまりにいふかひなき者とや思ハん、かやうにいはるゝ上ハ、ふたゝびもとの方へ帰りて、熱田へ行きて、元服せんとおもふなり、おことしバし、爰に待てたまへとのたまふ、吉次も長者も尤もなる御事なり、御由縁ある大宮司の仰せ、ねんごろなれバたゞ行せたまへ、もし日数の

びて爰をたち候とも、商に道よりすれバ、木曽殿へ参りつかん頃ほひハ、前後もさうらふまじといふ、牛若丸さらバあからさまに参り来んとて、別れて熱田へ行き給ふ、七八里ばかりの所なれバ、郎党めく者一人ばかり連給ひしがそれも半里ばかり行て、脚を痛て苦しがれバ、心くるしとて矢矧へ帰給ひて、たゞ一人にて急かせ給ふ、道行人のいふを聞に衣の里の桜盛ハすこし過にたれど、猶いミじき気色なりといふに、連なる男心して見にゆけ、あの辺ハ稲荷の神を祭り損じて、わろき狐の人たぶらかすぞといふも田舎びて□し、牛若丸武き心備はり給ふものから、ミやびたる情もそひておハしけれバ、我木曽へ下つかん後にハ、武略の物がたりの外ハ、他事なかるべし、かく此あたりに徘徊するこそ折よけれ、此ついでに花を見て、いさゝか心も慰めばやとおもひて、横道ながら衣の里へ行給ふ、牛若丸今日の出立にハ、薄花桜のひとへに顕紋紗の直垂を着給ひて、若々しく美しき姿、よの常ならずいかめしき中に、なまめきたる方加ハりて、叡山にも三井寺にも、類ひあるまじと沙汰ありし児にて、鞍馬に出て程もなけれバ、旅やつれも目にたゝず、色は雪のやうに白う目ざしのびらかにてかね黒に眉細う作り給へれバ、げに女も及ばぬほどの御姿なり、法師ばらの、懸想心ありしと聞しも、げに理とぞ見えし、衣の里ハ岡崎の北一里余りにて、名所と聞たまひしも空しからず、其頃ハ桜の木と

も、いと多くてむれ来る人も少からず、牛若丸あはれ物おもひなくて見たらんに、うらゝかなる春の日かけの、いとど面白からんなど覚して、花の木のもと立さりがたく夜に入ても熟田へハ行つべしとて、詠めおはすほど、おもはずも未のさかりになりぬ、かゝる折しも見やり給ふ向ひの方に、乗物跡にかゝせ、あまたの女どもそひて、姫君めきしひとを打かこひ（囲）行く、牛若丸取集たる事の心に絶ずながら、若き心にさすかに女ゆかしうて、尻につきて歩ミ給ふ女はらもこなたを見かへりつゝありく中に、腰元にハすこし上臈めひたる女ありて、ことに心ありげに目をとめたり、姿いとなまめかし、かゝる程に間近くなりて、ひとり年たけたる女、何やらん、打さゝやけバ、のどやかにかへりミたる、是なん主の媛君なりける、年ハ十五六ばかりにて、なり姿あてやかにて髪のさがりはひと長う、眉ハ柳のやうに打けふり、顔のにほ（匂）ひいふべくもなくて、打ゑミたるさま更に此世の人にハあらす、月の中なる内侍のかミや天下給ひけん、楚国の雲にも掩ハれぬ風情にて、目の前の花もおされぬべし、おもハずに打見合て、さすが恥かしとやほゝゑミたるばかり、又もとのまゝにかしづかれ行く、遠きもろこしの楊貴妃も、見ぬいにしへの小町とても、かくばかりにハあらじと思ふに、牛若丸の魂は此時女が袖に入りて、猶行さきを見給ふに、女どもハすべて道つらなる屋敷へ入ぬ、牛若丸年頃京ざまの上臈も、目に

見ならひておハすれど、かゝる類ハなし、東路とても打すてられぬ物ぞ、さるにてもいかなる人のいつき娘にか、名のりをだに、聞まほしと覚すに、かたへなる人の、あれバ長者か別荘なりといふ、聞てもしハ長者といふハ、矢矧の長者にて娘ハ吉次が語りし、浄瑠理にかと思ひ給へバ、ましてゆかしさの一方ならず、屋敷のかまへにも、花の木どもかこひ入れて、隔たりし詠めも、中々なり、屋敷の隅の方に、小き門つくりて、あやしのくづ屋あり、茶をすゝめ、くだものやうのものあきなひて、花の頃人いこハする家なり、おもふにいらぬ所の地を、此商人のかり物して、すまひをるなるべし、牛若入て休ひ給ふ、ほのかに琴の音の聞ゆ、爪音もなミ〳〵ならず、しかも想夫憐の曲なれバ、立もせず耳をすまして聞給ふ、茶を売翁、鬚がちなるがあやしミて、花見る人ハミな帰らせ給ふに、和君一人ハ人待あハせてやおハすと問れて、されバ某音曲の道を、殊のほかに好きてあれバ、あの琴の音に引留られて、かく帰りもやらで、たゝずむなりとの給ふ、かくいひ給ふも都詞なれバ、田舎翁も心にくゝ思ひ、さてハ苦しからじ、日の暮るまで聞せ給へといふ、うれしくもいふ物かなと、其詞につきて、おのれ笛ふくわざを少々わきまへており、あの琴の音承りて心うかれぬ、爰にて吹ていかゞあらんといひ給へバ、さても〳〵ミやひたる殿かな、何条くるしからんといふ、牛若丸懐より取出給ふハ、母常盤より伝給ひし葉調の漢竹の笛にて吹出給ふより、げに梁上の塵も

起らんばかり妙なる音なれど、翁ハたゞ上手とばかり聞なしたるに、奥の方にて人のよべバ、翁ハ内へ入ぬ、しバしありて三十あまりなる、清らかなる女出来り、打笑ミながら、殿の御吹物に聞ほれぬれバ、翁に代りてまいりぬといふ、いとなれ〳〵しげにて、衣服もきたなげならず、さすが下種女なれバ、胸あらハにないがしに着なしたり、牛若丸ハ会釈して、まだ若き笛の聞にくき物の音から耻かしけれど、翁のゆるし給へバなり、扨ハ翁ハ親人にか、さん候今物詣で候へバ、わらハ代りて参りしなり、都人とハ申ながら、上手にこそ吹給へれ、しかし爰ハ合せ給ふに、遠し、近く聞ゆる所奥に候が、そとハ常の住家にて、ものむづかしう候へども、御厭なくハ参らせ給はぬかといふ、それハ望む所なり、されと翁の居給ハぬに和君の心のまゝに、おのれを奥深く伴なひ給ハゞ、人や咎とたハふれ給へバ、女打笑て、駒もすさめぬえせ女、人も目をとめ候ハじとて、先に立て行く、花の雲に掩ハれながら、琴の音ハ次第に近くなりぬ半丁ばかり行バ柴の菴あり、小庭なとしつらひて、よしありげに住ひなしたり、田舎翁とのミ侮しを、扨ハ故ある人の隠れ家なりと思ひて、縁に尻かけておはす、坐敷にのぼりて緩やかにおはせとて、女ハ立ていぬ、しバし有てかたへの伊豫簀、さら〳〵と音して、一人の女ハ菓、一人の女ハ茶を汲ミて出来ぬ、ミなよろしき程の姿にて、かの媛君にくらべなバ、桜にならぶ深山木とやいふべき、まして美男なる

牛若丸なれバ、露ばかりも心ハ移し給はねど、若人の習ひなれバ袖をひかえて、おこと達ハ茶を売る家にてハ見ざりしが、爰の家に使はれてやある、あひミんことハ命なりと、あざれかゝり給へば、女どもほゝ笑ミて、牛若の御顔をよく〳〵見て、袖ふりきり今又参り候ハんとて、これも立て行く、又しばし吹給ふに、琴の音やミしかバ、我笛もまた吹さして、くだもの見やり給ひて、疎なる饗の仕やうかな、など、つぶやきておはすに、初の女来り、和君ハい□（ミ脱カ）しうすかされ給ひしとて、例の打笑へバ、何にかく笑ぞと問給ふに、女猶打笑ミながら、欺かれ給ひしハ君の御あやまりに候へバ、腹たゝで聞せ給へ、さきに参りつる二人の若き女、いかゞ見給ひしぞと問、不思議なる物のいひやうかな、とハ覚せど、うつくしとのミ見しと答へたまへバ、かの女御不審ハ理とこそおほゆれ、若き殿にておハせバ打つけに申さん、無礼ハゆるさせ給へ、あの二人の女ハ此わたり、貧しき百姓の子どもにて、親々のたつき（生計）心にまかせねバ、其助にせんとて花の頃をさいはいに、若君達をそゝのかし参らせ、情あきなふ者にて、いはゞ傾城にて候へども、田舎めきたる中に、情ぶかき所の交たるも面白う、却て事のやう替りたる、御慰めにこそ候ハめ、且ハ孝行なる志、哀れとおぼして、いづれなりともめされて、かたらハせ給ひなんといふ、牛若丸ハおもひのほかに驚かれ給へども、かゝる筋に腹たち給ハんハ嗚呼がましく、さりとて姫君見初てハ、まして大方の女ハ物ならず覚へ給へバ、扨ハさやう

にや、それもめつらしからんなれど、けふハ要事のまゐりがてらなれバ、またかさねてこそと、いひ遁れ給ふを、女其要事ある人の、などしづかに琴聞んとハの給ひしぞ、誠こゝの家ハ、琴聞ために設たるにてハ候ハぬ物を、推量まゐらするに、見給ひし女ともの御心にいらぬなるべし、よし〳〵さらバ一段、うつくしき人を参らすべしといふ、いかなる美人おはすとも、我ハはや帰りなんとの給ふを、あなかちに推とゞめて出て行く、例の待せて寄もこず、不審晴ねハ空うちながめ居給ふほど、日も暮かゝりぬ、かの鞍馬のおそろしき谷にて、天狗（木霊）こたまをも、物の数とも覚し給ハざりし御身の、此桜木の花やかなる園にゐて、女どもに嗚呼者に、弄せられんハ口をしと、心あハたゝしうなりしが、又思ひかへして、是ハ昼のほど、人のいひしに違ハず、しや狐がたぶらかしつるなり、さらバごさんなれ、却りて興ある事ならんとおぼすほど、例の女来れバ、古狐めそこ動かさじとの給ふ、女驚きてあらおそろし、信田の森にてハ候ハぬを、いざこなたへいらせ給へ、今一人のけいせいは、奥の間に待つけをりといふ、牛若丸畜生の仕業、何ばかりの事あらんとおぼせバ、わざと笑顔を作て、女ハ人を迷ハすものなれバ、狐殿といひしなり、奥まりたる穴、きよらかにてよからんなど、いひ〳〵おりて連立てゆく、又半町ばかり、行きて竹の透垣うるハしう仕わたして、殊更に田舎めかせたる柴の戸あり、わらハこなたよりまいりて、かけがね

はづし候ハんとて、女ハ垣にそひてめぐりて、右の方へ入ぬ、牛若丸ひとりたゞずミて、物のひまより内のさまを伺ひたまふに、外のちりなん折の為とや、遅桜ひも解かゝりたり、これはわざと移し植たるものとおもはる、同じ小柴垣なれど、笛ふき給ひし所のよりハうるハしう結たてゝこなたのハ花さかぬ木草も、見所あるやうに植なしたり、狐のわざにハ念いりたる化しやうかな、傾城のふしどにしてハいとゞ事々しやと、覚す垣を越たるさくらの枝に、鶯の来て啼塒ともしつべきさまなり、牛若丸あやしミて、桜にハ鶯の寝ずと聞しを、飼鶯の俄に放たれて、木をも擇まぬなるべし、鶯のぬしもゆかしとおぼすに、其人なるべし、迦陵頻伽のやうなる声音、ほのかに聞えて、山里いかでとおもひしを、春しらせつる客人のおハしたれバ、汝をバ逃しつるよといふ、よもわが事にてハあらじ、いかなるやごとなき、客人の来たるにかとおもふほど、女の童紙燭持来りて、柴の戸あけて入れ参らす、案内するまゝに入りたまへバ、木立立石などのありさまえもいはず、画師も書及まじき景色にて、更に都にも劣らず、出居の縁の上に、猶鳥の篭持て立たる女あり、待参らする事久しといふ牛若驚きてよく〳〵見給へば、紙燭の火影ハほのかなれど、昼のほどの一目ハ打も忘ず、乗物かゝせて歩行たりし女なり、あまりの嬉しさにハ、取出ん言の葉もなくて、人違にてやおはすらん、扨ハ夢路かとの給へバ、女ほゝゑミて、返す衣の里なれバ、さもやおぼすらん、されど

かくばかりはからひて、迎へ奉りしを、人たがへとの御詞ハ情なしや、しかし客人と申せし、文字の隔心にやおほし給ふらん、わらハが言あやまりなり、いざたまへとて手をとりて、障子の内へともなふ、仙人の住家のやうにおもハる、燈火昼のやうにともしつらねたり、若き女どもぞゞめきて、さきの菓や茶を持来りし、二人の女も外のも、此たびハすべて腰元の形にてをり、正身の女君ハ、顔あからめ口おほひして、火の影に背きておハす、女どもハ光る君をたばかりおほせつ、などさへづり騒ぐ、牛若丸ハ源氏といへる、なぞ〳〵にやと思ふにも、むね驚かれ給ふに、あなかしがまし、わらハこそ、委しき故よし申奉ぬとて、出来たるハ、さきの案内せし女にて、局の左近なりけり、是もひなひたる装束ぬぎ更て、袖口正しう着なし、髪のゆひさまをもかへたり、又もすかされ給ひしよと、いひさま坐につきて、是なん矢矧の長者の姫君、浄瑠理媛にておはすといふに、牛若丸扨こそと覚せど、其女君某に何の用ありて召よばれしそと、わざと色めかしからず、詞少なにのたまへバ、左近すこし、瑠理君の方を打見なから、されバ候媛君の恋給ふは、昨日今日の事にてハ候ハず、是御覧ぜよとて、一ツの人形を取出つ、見給ふに牛若の御姿を、さながらなれバ、あなあやしいづれにてか、某が姿をバ見給ひしぞと、驚き給ふ、左近又いひけるやうハ、其故ハ事長けれバ静に聞せ給へ、まつかう誘ひ奉りたる子細を申さん、昼のほど君の御ありきの姿、瑠理君の夫

とおもひ戯れ給ひし、此人形に露も違せ給ハねバ、御ミつ
からをはじめ参らせ、人々も扨々と申す、いとほしけれども、
いつ地の人か、問ひ参らせんもはしたなくて、媛君せんかた
なさの余り、想夫憐の曲しらべて慰さめ給ふに、遠音に
笛にてあハせ給ふ、妙なる御音色いづれにぞとて、侍共に
問へバ、茶を売る翁が家なりと申す、我とひとしくあだ
めく人ならん、誰人にか見て来よと仰られて、わらハ物
の陰より伺がふに、君にてましませバ、いと嬉しく瑠理君の
御よろこびハさらなり、いかで是へともなひ参らせよと
仰給ふ、されバ其たばかりにかうはからひていかにも〳〵、
二心なからん人をと存じて、且ハ試ミに腰元たちを、傾城
と申して、そゝのかし奉りつれども、御心さらにミだれたま
ハず、いよ〳〵真実なる御方にて、比類なき聟君と存
てかくハさそひ参らせしなりといふ、牛若丸もさすがに
恥かしくて、おのれとても同じ心に、見そめまいらせしが、人
形にまでつくり置給ひて、深おぼし給ふ事とハ、夢にだに存
し候ハざりし、かくばかり厚き御志し、いかでそむき参らす
べきとの給ふ、又白糸が心にハ、はじめ途中にても、わが慕ひ
つる里若ぞとおもひて、見ほれたりしが、かゝる事になりてハ、
近まさりしつゝ、今ハつゝミ兼て、都と申ても廣き事なれど、
もしハ御生れハ、五条あたりにてハおはさぬかと問、其辺にてハ
候ハすとの給ふ、さらバ鞍馬寺におはせしなと問ハ、打驚かるゝ

をさらぬけしきにて、いなとよ宇治のわたりの物なりとの給ふ、
されと顔の色すこしかハらせ給へバ、白糸ハはや牛若殿なり
里若にてハあらぬ、なりとしりぬされど、似たる人をさへ姫君に
取らるゝ事と、すこしねたましうなりぬ、是ハ人々ハ知らぬ
事なるべし、やがて酒肴くだものなど出て、ミな〳〵さま〳〵に
物語りしつれど、瑠理君ハまだ打とけ給ハねバ、とくやす
ませ参らせんとて、御二方を帳臺へ入れたてまつる、瑠理君
ハ猶恥かしながら、都人恋しとおぼしゝより、人形作たるが、
ふと心にしミし事語り給ひ、今またそのやうの人に、逢ひ
奉りし嬉しさ、いつの世にかハ忘るべきとの給へバ、牛若丸ハさ
いつ頃吉次がかたりしより、御名をバうけ給ハりぬ、吉次が申
せしハ、我妹の白糸に似給ひしなど申せしが、偽りならざり
きとて、御身の上も明し給ひ、春の夜の長からぬを恨ミつゝ、
うらもなき御語らひのかさなりぬるハ、げに衣の里の名さへ
むなしからずと見ゆ、さて明日となりて、熱田へ行んとの給ふ
を瑠理君とゞめたまへバ、いなにハあらでとゞまり給ひぬ、其明る
日ハ雨ふりぬ、またの日ハ風騒がしなど、さま〳〵といひなして、
人々も別れがたうとゞめ奉る、木曽の事おぼし給はぬにハ
あらねど、物むづかしさも紛れはてゝ、四五日ハ逗留し給ひぬ、
男女の道ハ、有智無智の差別なく、心の外の事なれバ、げに
さもおハすべくや、千世もかはらせ給ふまじき御誓もあれバ、
白糸ハとても及ばぬ事の、心の底だに明し奉らんと思

に其ひまもなし、熱田も木曽もさハいへど、急がぬ事ながら、あまりに日数へバ、あしかりぬべし、いつまでとも尽せぬことなり、熱田より直に木曽へゆけバ、遠き所の別れながら、また程なきに参り来んとて、いよ〳〵別れ給ふべきになりぬ、瑠理君かなしさながら、事のやうよく聞わき給ひて、出たゝせ奉り、又おハさんまでのかたミに、わらハが代の御伽たてまつらんとて、女の人形取り出て参らせ給ひ、是ハかたくなしき姿うつしたる物なり、君の御姿のをハ今迄のやうに、身を離たて、わらハ持てあらんとの給ふ、牛若のたまひけるハ、夫はかりにてハおのれがかたミといふべきにあらず、身にそへて大事とせる品参らせんとて、かの横笛をとゞめ給へバ、それハ嬉しき賜物なり、さらバわらハも、今一品そへ参らすべしとて、堀出給へる鏡をバ参らせ給ふ、こればかりを互の御慰にて、漸に袂を別ちて、牛若丸ハ熱田へぞ参り給ひける、白糸ハたゞ人しれず、あぢきなき世の中を、おもひつゞけて、打なげきをり、此頃兄の吉次も、所々の商ひに心いそぎせられけれバ、白糸よびて逢ふまでもなくいそぎてかしこへ打立けるとぞ、

浄瑠理媛物語巻二畢